

東京農業大学 拓友会ニュース

第35号・2019年9月30日発行

発行所 **東京農業大学拓友会**

〒156-8502 東京都世田谷区桜丘1-1-1
TEL.03-5477-2401 FAX.03-5477-4032
e-mail : takuyu@nodai.ac.jp
<https://www.nodai.ac.jp/academics/int/int/takuyu/>

第61期総会および懇親会のご案内

第61期の拓友会総会および懇親会を次のとおり開催致します。

今年度も収穫祭期間中に開催します。数々の特別イベントも計画されていますので、万障お繰り合わせの上、多数ご出席下さいますようお願い申し上げます。

なお、令和元年の収穫祭は11月1日(金)より11月3日(日)まで開催されます。

- 総会 1. 日時 令和元年11月2日(土) 午前11時より12時まで
2. 場所 2号館3階 国際農業開発学科 共通利用室
- 懇親会 1. 日時 令和元年11月2日(土) 正午より
2. 場所 2号館3階 国際農業開発学科 共通利用室
3. 会費 4千円(配偶者、子どもの同伴歓迎致します。
配偶者および子どもは、一人につき2千円)

お問い合わせはこちらにご連絡をお願いします。

〒156-8502 東京都世田谷区桜丘1-1-1

東京農業大学国際農業開発学科 中曽根 勝重

Fax: 03-5477-4032

E-mail: katsu10@nodai.ac.jp

どうぞ皆様お越し下さい。なお、懇親会の方の参加も歓迎します。

ブラジル、パラグアイ出張を終えて

山田 隆一・入江 憲治

2019年7月24日から8月2日まで、新部副学長、入江学科長とともに、ブラジル、パラグアイ出張に行っていました。今回、ブラジルでは、ブラジル東京農大会創立50周年記念式典が開催されました。それに先立ち、大島元会長をしのぶ会および開拓先没者慰霊祭が執り行われました。しのぶ会は、農大会館にて行われ、大島元会長のご家族ともお話しすることができました。また、慰霊祭においては、亡くなられたブラジル農大会の先輩方の名前が一人一人読み上げられた後に、先輩方の墓前にて、ブラジル農大会の多くの参列者とともに、手を合わせました。その後、ブラジル農大会館にて、50周年式典に参加しました。冒頭、原島会長が挨拶されました。原島会長は開拓の原点に立ち返ることの重要性を説かれ、ブラジル農大会の歴代会長の足跡を丁寧に説明され、その功績を称えとともに、

我々がそこから学び、引き継いでいかなければならないということを説かれました。この心のこもったご挨拶を歴代会長の写真を見ながら聞いていましたら、あらためて身の引き締まる思いがしてきました。その後、新部副学長、入江学科長、野口在サンパウロ日本国総領事、佐藤JICAブラジル事務所長が挨拶に立たれ、祝辞を述べられました。その中で、ブラジル農大会の存在の大きさ、そして特にブラジルの日系人社会におけるブラジル農大会の先輩方の大きな貢献についてあらためて認識させられました。

他方、パラグアイにおいては、イグアス居留地にて、新旧の農大の卒業生とお会いすることができました。卒業生の皆さん、元気に活躍されており、自身の農業経営のみならず、市議員として活動される方などをはじめとして地域社会をしっかりと支えておられることがわかりました。イグアス居留地では、農大の先輩方がパラグアイの人たちからも尊敬

され、感謝されていることを知らされました。また、イグアス農業協同組合などを視察する機会にも恵まれました。さらに首都アスンシオンにて農大会館に案内され、パラグアイにおける農大会の足跡を多くの写真をみながら辿ることができ、あらためて農大の先輩方の偉大な努力と功績について理解を深めることができました。

今回の出張を通じて、農大の中において、ブラジルやパラグアイなどラテンアメリカ諸国に移住された先輩方の営んできた農業そしてラテンアメリカ諸国の農業全体に関心を持つ教員や学生の輪をもっともっと広げていくことの重要性を認識した次第です。そこから我々が学ぶことがとても大きなものであると考えるからです。実習や視察に訪れた学生や教員はその経験を周りに広げていく責務を負っていると考えます。私たちもそうした観点から特に学生たちの世界観を広げるべく努力していく所存です。

最後になりましたが、今回の出張において、ブラジル、パラグアイの校友および関係者の皆様方に変なお世話になりましたことを特記させていただき、感謝申し上げる次第です。

今後、ブラジル、パラグアイの農大会の皆様方の益々のご健勝とご多幸をお祈りしながら出張報告に代えさせていただきます。



ブラジル東京農大会創立50周年記念式典にて



パラグアイ農大会館前にて

卒業生の活躍：ベトナムでチーズ作り

小貫 敬之輔 (48期)

ベトナムに渡り8年が過ぎました。今、ダラットという高原の街でチーズを作っています。

私は48期生として国際農業開発学科に入学しました。所属していた農業開発政策研究室(現:農村開発協力研究室)にベトナム人院生がおり、その先輩の農村調査に同行したのが初めての渡越でした。その時に農村のリアルな生活をこの目でみて、知ることができたのは自分の中で大きな経験でした。そしてベトナムという国が大好きになりました。大学卒業後は民間会社に就職しましたが、漠然と20代のうちにベトナムで何かチャレンジしたいという気持ちが強くなり、会社を退職して渡越を決意しました。最初は現地の大学でベトナム語を履修して語学習得に励んでいましたが、その時期に、ベトナムでピ

ザ屋をオープン予定だという日本人(今の社長)と知り合い、一緒にやらないかと声をかけてもらいました。

「ピザに使用するチーズも自分たちで作りたい」、その言葉からチーズ担当としての私のベトナムでの仕事がスタートしました。まずは原料となるミルク探しから。ざっくりとした情報だけを頼りに、牧場探しに奔走しました。数リットルの試作用ミルクを入手するために田舎道をバイクで1日中走る事もありました。なんとか安定的にミルクを確保した後は、本格的にチーズ(モツツアレラ)作りの開始です。農大出身でも、もちろんチーズなど作ったことなく、本当にゼロからでした。インターネットの資料やYouTube動画だけを頼りに、試作を始めたのですが、最初の頃は当たり前ですが全く成功せず、形にすらなりませんでした。数か月間、毎日試行錯誤

を続け、なんとか一定基準のものができるようになり、オープンした自社ピザ店舗でも提供できるようになり、同時に他のレストラン、ホテル、スーパーなどへの外販もスタートしました。



写真1:モッツアレラチーズ製造中

チーズを作り始めて、モノ作りの素晴らしさに改めて気づきました。私の仕事はとてもシンプルです。良いものをつくれれば、美味しいと皆に喜んでもらえ、悪いものをつくれれば、お客さんは離れていきます。美味しいと言って頂いた時の喜びは本当に格別です。とてもやりがいを感じます。

話しを戻しますが、6年前より製造拠点を都市部から高原地帯のグラットに移しました。グラットはベトナム国内で酪農が盛んな地域の一つで、標高1,000m以上で涼しい気候が酪農に適しています。拠点を移した時は、工房となる家探し、牧場探し、スタッフ探しなどまた全てがゼロからのスタートで、この時は正直かなり苦労しました。牧場エリアは市内から数十km離れており、外国人が誰もいない田舎に1人で住み、すべてベトナム語だけでの仕事と生活に寂しくて心が折れそうにもなりましたが、この地で出会ったベトナム人スタッフの皆に支えられ、何とか製造を軌道にのせることができました。現在、工房では、毎日3tのミルクからモッツアレラ、カマンベールなど10種類以上のチーズを作っています。また、環境に関する取り組みも実施しています。近隣の有機農家と提携して、チーズ製造時にでるホエイを再処理し液肥として利用、そこで育てた野菜を自社レストランへ提供、レストランからでた生ゴミの堆肥化（ミミズ利用）など。環境プロジェクトに関しては、今年から会社

張っていつてくれています。

会社自体も現在はベトナム国内で多店舗を展開しており、7年前の設立時は私を含め4人だったメンバーも1,000人を超える規模に達しました。今後アジア近隣諸国や欧米への進出も視野にいらしています。ベトナム発のピザ屋が本場のニューヨークやパリ、新興国のインドで勝負する、こんなに面白いことはありません。私たちは一般的な開発プロジェクトとは違い、ビジネスとして事業を展開しているので、第一の目的としては利益を追及することにあります。ただ、その取り組みの中で、スタッフの雇用、地域発展、新たな食文化の創造など、ビジネスだからこそ、より大きなインパクトで継続的にベトナムの発展に貢献できていることもあると思っています。美味しいチーズが作れるよう、さらに頑張っていきます。

最後に学生の皆さんに一言ですが、何でもよいので興味あることにまず取り掛かってみてください。考えすぎて動けないのはもったいないです。動機が弱くてもとりあえず動いてみる。その中での思いがけない出会いや経験が将来の道を決めるかもしれません。楽しい学生生活を。



写真2:熟成中のチーズ

※本記事は『ひろばNo.48』（国際農業開発学科発行）に掲載されたものです。
執筆者に承諾を得たうえで転載しています。

学科の動き

2018年度の本学科（入江憲治学科長・中西康博主事）の動静は以下の通りである。

2018年					
3月	20日	2018年度卒業式(卒業生158名)	9月	21日	後学期授業開始
4月	2日	2018年度入学式(入学者154名)	10月	14日～20日	農業開発実習(第3組、東京農大宮古 亜熱帯農場にて、学生42名、引率:中西 康博教授)
	5日～6日	新入生学外オリエンテーション (神奈川県立足柄ふれあいの村)		2日～4日	収穫祭
	9日	前学期授業開始	11月	3日	拓友会第60期総会、懇親会
	15日～21日	農業開発実習(第1組、東京農大宮古 亜熱帯農場にて、学生43名、引率:本橋 慶一教授)		5日	体育祭
6月	3日～9日	農業開発実習(第2組、東京農大宮古 亜熱帯農場にて、学生44名、引率:中曽根 勝重准教授)	12月	26日～1月6日	冬季休業
	2日	教育懇談会	2019年		
7月	21日～22日	地方教育懇談会	1月	7日	後期授業再開
	27日～8月2日	前学期定期試験		29日～2月1日	後学期定期試験
8月	4日～5日	オープンキャンパス	2月	31日	卒業論文提出締め切り
	6日～9月20日	夏季休業		6日～12日	農業開発実習 (第4組、東京農大宮古亜熱帯農場にて、 学生44名、引率:檜村 修教授)
9月	3日～7日	農業総合実習(1年生、鯉淵学園にて)	3月	20日	卒業式



※学科の様子については学科ブログ「情熱ひろば」

(<http://nodai.cc-town.net/modules/nmblog/categories.php?mode=show&category=6>) も是非ご覧ください。

◀スマートフォンからの閲覧は左記のQRコードよりご確認ください。

2018年度 東京農業大学国際農業開発学科卒業論文 拓友会賞

溶存鉄溶出におけるマングローブベントスの役割

農業環境科学研究室 直井 香子
指導教員 中西 康博

本研究は、海洋による二酸化炭素吸収と海洋生産性の基盤を担う植物性プランクトンの増殖を左右する鉄の、熱帯・亜熱帯における自然供給メカニズムにおいて、マングローブと林床土壌との化学反応にベントスを介在させた、植物-土壌-動物系モデルを確立するため一連研究の一環として実施され、マングローブ葉を摂食する巻貝キバウミニナ *Terebralia palustris* の生息密度と林床土壌および土壌水に含まれる溶存鉄のサイズ画分との関係を明らかにすることを主目的としたものである。具体的には、*T. palustris* の生息密度調査、供試土壌および土壌水の採取を沖縄県西表島北東部に位置する船浦湾内において実施し、採取した土壌試料の全鉄含量とサイズ分画法による溶存鉄画分、ならびにフェノール性物質含量等を測定したほか、供試土壌水中のフェノール性物質含量と溶存鉄の画分等を行った。

その結果、主に以下のことを明らかにした。

1) *T. palustris* の稚貝の生息密度は陸側から海側に

かけて高くなった一方、成貝の生息密度は反対の傾向がみられた。

2) 成貝と稚貝の各生息密度は、それぞれ *R. stylosa* と *B. gymnorhiza* の分布境界から *B. gymnorhiza* 中央部のプロットと、*R. stylosa* 海側林縁から *R. stylosa* 中央部のプロットで最も高く、それぞれ30個体/m²および16個体/m²を示した。

3) *T. palustris* の成貝生息密度と供試土壌中の溶存鉄の各画分の含有量との間には有意な相関関係は示されなかったが、同密度と供試土壌水中の溶存鉄(<0.22μm)ならびにコロイド状鉄(0.025~0.22μm)濃度との間には有意な正の相関関係が示された($R^2=0.28$; $P<0.05$ および $R^2=0.36$; $P<0.05$)。

これらの結果から、本調査地に生息する *T. palustris* は、成長にしたがい分布域を海側から陸側に移動させること、また *T. palustris* の成貝と稚貝を比較すると、マングローブ林床土壌水中への溶存鉄の溶出に主に寄与しているのは前者で、その結果生成される溶存鉄の画分は、コロイド状鉄が主体となることが示された。

以上、本論文の内容は学部生の卒業論文としては特筆的に精度が高く、また当該関連研究成果として新規性が高いと評価できる。

受賞者の言葉

直井 香子

この度は、私の平成30年度国際農業開発学科卒業論文に対し拓友会賞を頂き誠にありがとうございます。この賞を頂けたことを大変光栄に思っております。卒業論文を執筆、完成させるにあたって、農業環境科学研究所の先生方、先輩、同期、後輩の皆様には大変お世話になり支えて頂きました。この場を借りて感謝申し上げます。

私は「溶存鉄溶出におけるマングローブベントスの役割」という題目で卒業論文を執筆しました。短大からの編入前に中西教授から研究内容のお話を聞かせていただく機会があり、その時に植物と海との関係や、それを取り巻く環境の作用などの生態系メカニズムに感動した感覚は今でも覚えています。そのことがきっかけでマングローブに興味を持ち、卒業論文研究のテーマとしました。本研究は海洋における溶存鉄供給に深く関係しているマングローブ生態系についての研究で、具体的には、マングローブ葉を摂

食する巻貝キバウミニナの生息密度と、林床土壌および土壌水に含まれる溶存鉄のサイズ画分との関係を明らかにすることを主な目的として研究を行いました。沖縄県西表島での調査は体力的に大変な面もありましたが、キバウミニナの生息する環境や動態を実際に観察することができ、先生や先輩方と多くの時間を共にしつつ他の関連研究成果や進展について聞くなど、たくさんのことを勉強する大変貴重な体験になりました。また、採取した試料の分析や論文執筆の際には失敗が度重なることもあったのですが、先生や先輩方に多くのアドバイスを頂き、時には遅い時間まで研究室に残ることもありました。ですから、この卒業論文が拓友会賞を受賞できたと知ったときはとても嬉しかったです。

現在私は観葉植物のレンタルを主な事業とする園芸会社に勤めております。卒業論文の研究内容とは離れた分野ではありますが、卒業論文で賞を頂くことができたという自信や、そのためにしてきた努力、また植物に対する知識など、大学時代に身に着けたことを生かしこれからも精進していく所存です。

今年度で退職する教員の挨拶

学科と出会った回想録

板垣 啓四郎

農大で過ごした年数は、定年を迎える今年度を含めて実に47年にも及んでいます。この間、拓友会には本当にお世話になりました。多くの先輩や後輩の諸兄と旧交を温めあうことのできる機会となりました。在職期間中多くの方々が学窓をあとにしましたが、このなかで私が知っている卒業生はほんの一握りに過ぎません。どこかで親しく交える機会があれ

ば、ありがたく思う次第です。

さて、私は47年前に郷里の鹿児島県から上京して、東京農業大学に入学させていただきましたが、そもそも農業拓殖学科（現国際農業開発学科）とはどのような縁があったのか、述べさせていただこうと思います。

高校2年のある日、姉の友人から「NHK教育テレビで、今夜、韓国のハンセン氏病患者社会復帰村で農業自立活動を支援している学生グループのドキュメント番組がある」と聞かされて、何気なくその放送

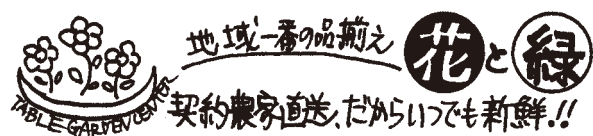
住まい作りのトータルプランナー
宅地建物取引業 千葉県知事免許(11)第6298号



南房商事株式会社

代表取締役 藤井 勝政 (拓殖1期)

〒297-0029 千葉県茂原市高師57番地
電話 0475(23)3251(代表)



テーブルガーデンセンター

TEL 045-935-4187(代)

〒226-0023 横浜市緑区小山町 611-3

代表取締役社長 篠原 敬一 (拓殖20期)

を観たのが始まりでした。それは農業拓殖学科の学生からなる奉仕会というサークルによる海外支援活動の記録番組でした。「自分たちは彼らに何ができるか」「活動を通じて彼らから何が学べるのか」「海外での農業支援はどうあるべきか」などについて、韓国に派遣された学生グループが、顧問の栗田先生を円座の中心において、鈍い電球の光のもと真剣に語り合う姿をみて、「自分の進むべき進路はここだ!」と確信しました。この支援活動のプロジェクト・サイトには、学科卒業生の地曳隆紀先輩や笹子実先輩が国際協力専門家として国から派遣され、活動を続けておられました。夏季休暇を使って渡韓した10名内外の学生は、日中は農業奉仕活動、夜はミーティングという生活だったようです。その中には、私が農大在職中に大変お世話になった藤本彰三先輩や門間敏幸先輩が含まれていたようにも思いますが、記憶が定かではありません。テレビをみて、私もこういう先輩に続けたいと思ったものです。

1970年代はじめのその当時、どの大学も学生運動でキャンパスは荒れており、落ち着いて勉強し将来をじっくり考える環境にはありませんでした。またそのこ

ろ、アジア・アフリカ地域では、飢餓や貧困、栄養不足とそれによる疾病が蔓延し、部族間の紛争、インドシナ半島での内戦などで、多くの人命が失われる状況にあり、マスコミがその模様を連日報道していました。高校生のとき、漠然としながらも、将来は途上国の食料問題や農村貧困の解決に関わる仕事に就きたいと考えていた矢先、この番組に出会ったのです。

入学してから、迷うことなく奉仕会に入り、在学中は栗田先生から深い薫陶を受け、韓国で活動していた地曳先輩・いく子先輩、千葉先輩、そして学生としてテレビに出演していた先輩方と親しく交わり、多くのことを学ばせていただきました。在学中は韓国の社会復帰村で奉仕活動にも、携わりました。

偶然のきっかけで奉仕会に巡り合い、それはその後の私の方向を決定づけることになりました。奉仕会は30年ほど前に解散しましたが、私の中ではずっとその存在が心の中心を占めています。いまでも奉仕会の先輩や後輩たちと交流を続けています。奉仕会は学科へのエントリー・ポイントでしたが、育ててもらったのはもちろん学科です。学科と拓友会には、ただただ感謝あるのみです。

前を向いて生きていく

夏秋 啓子

2020年3月をもって無事に定年を迎え、国際農業開発学科から卒業することになりました。歴代の大学や学科の教職員の皆様、また、何よりも教員人生を共に彩ってくださった学生・卒業生の皆様に、まずは感謝を申し上げたいと思います。

東京農大着任時に、学科の特性を大切に、熱帯や途上国をテーマにするようにと伝えられ、「はい」と答えましたが、実はそれまで熱帯や途上国に行ったことも考えたこともなかったのですから大胆なものです。念願の東京農業大学に職を得られたことの嬉しさが、何にも勝っていました。幸い、熱帯の国々は性に合っていたようで、多い年は一年間で7回の海外出張も経験しました。その中で、研究テーマや研究者とのネットワークも広がっていきました。毎年、たくさんの卒論生や大学院生に恵まれ、親子あるいは叔父・甥と2代で指導したケースもあります。国内外の大学教員、研究者など専門性を活かして

活躍している卒業生も多く、「藍よりも青し」を実感しています。たくさんの卒業生との交流は続いています。それぞれの活躍や家族の様子などを知るのが、今後ますます楽しみになりそうです。

私の研究テーマは、熱帯作物の病害診断と防除です。最初は「拠点校方式による東南アジア学術交流事業」により、また、最後は（といっても来年度も続くのですが）「SATREPS(地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム)」により東南アジアで猛威を振るい始めたキャッサバのウイルス病とてんぐ巢病とに取り組みしました。その間、インドネシアを最多に東南アジア各国で、さらにエチオピア、ウガンダ、タンザニアとアフリカでまで研究のフィールドを広げ、留学生、ポスドク、研修生なども受け入れてきました。日本植物病理学会学会賞の受賞は、これらの成果を評価していただけたものと考えています。

大学では、大学から社会への発信の大切さを学んだ「食と農」の博物館館長をスタートに、様々なお役をいただけてきました。農学研究科委員長を経て、高野克己学長の下、教学や研究、あるいは国際

関係を担当する副学長を務めさせていただいたのは、教員あるいは研究者としての立場に加えて、まったく新しい視点で大学や社会を見たり考えたりするようになる大きな転換点となりました。2019年4月からは、東京農業大学の学園化構想の一環として開校した稲花（とうか）小学校の校長を兼務し、朝は小学校の校門で子どもたちを迎え、昼からは大学、途中で小学校に戻って給食を食べ、職員会議に出席、その後は講義やら学生さんの指導、とあわただしい毎日となりました。2020年4月からは小学校校長に専念することになりますが、新しい小学校の文化を作るという重い責任を理解しながらも、やりがいのある職務を頂いたことに感謝しています。

東京農大に奉職した37年間、大小の失敗をしてご迷惑をかけ、また、気づかないままに不快な思い

をさせた方々もいらっしゃるにちがいないと自覚しています。一方、困ったとき、行き詰った時、必ず助けてくれる人が現れてくださり、次のステップに進む機会が与えられたことは不思議です。「文句を言わない」は私のモットーの一つです。文句を言うだけで他人や社会を責めても何の発展性もなく、自分自身の品位を下げるだけです。その前に、もっと楽しいこと、建設的なことを考えて提案し、努力していけば、必ず道は開けるというのが、大学での生活を終えるにあたっての実感です。そして、これからもずっと前を向いて生きていきたいと思っています。拓友会の皆様にも、前を向いてそれぞれの道を切り開き、社会に貢献していけますよう願っています。

農大での活動を振り返って

田中 信行

森林総合研究所・熱帯農業研究センター（現 JIRCAS）などで32年間研究をした後、縁あって東京農大で教育に携わり4年、熱心な学生と教職員の皆様と素晴らしい経験をさせていただき、大変ありがとうございました。学生さんに私がどれほど役に立ったのでしょうか。退職にあたり、この4年を振り返ってみたいと思います。

熱帯植物生態学などの授業では、理論だけでなく、事例を多く取り上げ、世界の生態系を自分の訪れた国の写真を通して紹介しました。熱帯の生態を理解するためには、温帯の生態を理解していなければいけないとして、温帯の話も多くしました。生態系を深く理解するには、現場の調査が大変有用で、4年

間にいろいろな地域に調査に行きました。



写真1:十日町ブナ林の調査

小笠原世界遺産地域では侵略的外来種の樹木（アカギ・モクマオなど）や動物（クマネズミなど）の影響や在来林の再生の調査、筑波山・新潟県十日町（写真1）・白山山地世界遺産地域・北海道ニセコ山系では気候変動のブナ林（日本の代表的自然林）への影



ユーストマ シヤインホワイト



株式会社 ムラカミ シード
MURAKAMI SEED CO.,LTD

本 社

〒309-1738 茨城県笠間市大田町341
TEL 0296-77-0354 FAX 0296-77-1295
E-mail: info@murakami-seed.com
<http://www.murakami-seed.com>



ビオラ きいろももか

ムラカミシード
水戸研究農場

〒319-0323 茨城県水戸市鯉淵九ノ割5986
TEL 029-259-6332 FAX 029-259-6226

ガーデンショップ
花みどり

〒319-0323 茨城県水戸市鯉淵九ノ割5986
TEL 029-259-6332 FAX 029-259-6226

代表取締役会長 村上典男（拓殖23期）

村上 登（拓殖26期）

村上 忠義（拓殖29期）

響の調査、ベトナム北部ファンシパン山では森林の垂直分布の調査、奄美大島・対馬や台湾南部では自然林の観察などを行うことができました。調査の際は、希望する学生を同行させ、講義では伝えきれない現実の生態系や関連する人間社会を見せました。

小笠原は、固有の生物や生態系の価値から世界遺産として登録されていますが、その価値を守るために多くの努力がはらわれています。現在も侵略的外来種の影響は大きく、その駆除と自然再生が大きな課題となっています。植物では最強の侵略者アカギは、私たちの過去の研究で理論的駆除法はほぼ確立しているのですが、行政が実施している駆除事業の評価が必要です。卒論として、アカギ駆除が行われている桑ノ木山自然林で、各樹種の成長量や個体数の変化を把握する研究を実施しました。また、モクマオとクマネズミが駆除されつつある西島という小島において、過去の植物調査プロットを再調査することにより、自然再生状況を評価しました(写真2)。



写真2:小舟で父島から西島に向かう。

ブナ林の研究では、温暖化の影響でブナ林が衰退することがシミュレーション研究で予測されている筑波山ブナ林で、詳細な調査を卒論研究として行いました。筑波山ブナ林は、分布域の高温側限界に位置し、近年ブナの芽生えや若木がほとんどなく、ブナ個体群が衰退していることが分かっています。環境省モニタリングサイト1000に登録されている山頂付近のブナ林1haプロットの再調査を行い、過去10年間の各樹種の成長や個体群の変化から温暖化と

の関連を議論できました(写真3)。さらに、ブナ林の再生が悪いことの重要な理由として、健全種子の散布が少ないことを感じていた私は、その理由を明らかにすることを卒論のテーマとしました。学生と2年間にわたり、ブナの開花から結実に至る過程を調査しました。ブナの生育適地では、隔年で開花・結実が起こることが知られていましたが、筑波山では、毎年開花し、結実の過程で種子が虫害を受け、健全種子がほとんど散布されないことが明らかになりました。適地のブナ林は隔年開花結実により害虫の高密度化を防ぐ仕組みが働いていますが、限界立地の筑波山ブナ林ではその様な仕組みが崩れ、毎年開花結実に伴う害虫の高密度化のために、健全種子が散布できなくなり、ブナの再生が困難になっていると推定されました。



写真3:筑波山ブナ林の調査

このように自然生態系で起こっている問題を、フィールド調査によってプロセスやメカニズムを明らかにし問題解決につなげるという方法論を、卒論研究などを通して学生が体得されたと思います。卒業生には、大学での経験を生かして、社会でおおいに活躍されることを期待しております。農大生、頑張れ。



株式会社メルカード東京農大

〒156-8502
 東京都世田谷区桜丘1-1-1
 東京農業大学16号館2階
 TEL : 03-5477-2250
 FAX : 03-5477-2251
 Web : <http://ichiban.co.jp>



カムカム
ドリンク

ご挨拶

長岡 純子



2019年4月より、国際農業開発学科熱帯作物保護学研究室の嘱託助教に着任いたしました。任期が1年間であるため、着任のご挨拶とともに退職のご挨拶を申し上げます。

私は東京農業大学応用生物科学部 栄養科学科管理栄養士専攻を卒業後、農大大学院に進学して食品栄養学専攻の修士および博士号を取得いたしました。専門は食品微生物で、発酵食品中の微生物やその生産酵素について関心を寄せています。これまでに分子生物学的手法や血清学的手法を用いて研究を行った経験を生かして、現在は夏秋啓子先生のテーマに取り組む室員とともに、植物ウイルスの一種を検出可能にするべく技術の改良に試行錯誤しております。修了後初勤務のご縁を母校でいただき大変うれしく思うと同時に、歴史ある農大・開発学科の名に恥じぬよう身を引き締めて教育・研究に励んでおります。

開発学科の教員になって感じるのは、同じ農大生でも学部・学科が違くと学生の雰囲気はかなり異なるということです。開発学科の学生は、とにかくアクティブだと感じています。ある学生は、地元鹿児島の子実を世界に広めたいとの思いを持ち、まず現地の農業を知るため、長期休暇のたびに海外で農業実習をしていると話してくれました。また別の学生は、海外に渡航する費用を工面するために複数のアルバイトを掛け持ちしつつ、学業も研究もサークル活動にも励んでいて、その中で経験した数々の出来事について目を輝かせながら語ってくれました。自分が何のために何をしたいかという目

的意識がはっきりしていると感じます。新しいことにどんどん挑戦する姿を頼もしく思い、またそのエネルギーに力もらっています。

去る8月某日、研究室で5ヶ月間を共に過ごした海外長期受入留学生2名が帰国しました。この間、学生たちは留学生に実験を教え、一緒に授業を受け、時にはジェスチャーを駆使しながら冗談を言い合って親交を深めていたのが印象的でした。語学の得意不得意に関わらず皆コミュニケーションに積極的で、夏には連れ立ってレジャー施設へ遊びに出かけたり遠方の実家に招いたりしていたほど仲良くなっていました。そのぶん留学生の帰国は名残惜しいものでしたが、開発学科の環境と学生ならではの出来事でした。

開発学科は他にも言葉では言い表しきれないほど魅力にあふれていて、学科の一員に加わらせていただけたことへの感謝の気持ちでいっぱいです。素敵な学生たちがますます輝けるように、1つでも多くの知識を身につけてもらい、またより良い経験をできるよう、尽力していく所存です。若輩者ではございますが、残りの任期も日々邁進してまいりますので、引き続きご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。



海外長期受入留学生のお別れパーティーにて。
濃密な時間をともにしたため、「さよなら」は非常に寂しいものでした。



株式会社東京アグリビジネス

TOKYO AGRIBUSINESS CO., LTD.
緑地防除管理・請負メンテナンス・資材販売

代表取締役社長 野瀬 忠
(昭和52年 拓殖18期)

〒252-0302 神奈川県相模原市南区上鶴間2-7-7

TEL 042 (744) 6237
FAX 042 (744) 6295

農業生産法人 (株)ライフオン

樋口 稔
(拓殖 10 期)

〒059-0272 北海道伊達市北黄金町 119-47
〒181-0004 東京都三鷹市新川 3-15-12
Tel: 0422-48-8976
Mobile: 090-3203-4950

新任教員の挨拶

寺田 順紀



2019年4月から助教として国際農業開発学科に加わりました寺田順紀です。熱帯園芸学研究室に所属しております。

私は本学科の卒業生で2007年に国際農業開発学科に入学しました。入学後間もなく熱帯園芸学研究室に入室し、頼もしい先輩、優しい後輩と、同期たちと圃場に出て畑仕事、終夜で実験、キャンパス内の銀杏を拾って、剥いて収穫祭で販売、といった至って農大生らしい学部生時代を過ごしました。

その後本学大学院の国際農業開発学専攻に進学し、大学院では植物が有する香りについて興味を持ち、研究をしてきました。多くの植物由来の香りがある中で、私は特に“みどりの香り”と呼ばれる植物の青臭みの成分について着目し、植物ホルモンの生成を増加させたり、環境ストレス耐性を向上させたりすることについて研究を行いました。この成分を作物に嗅がせることで、生長をコントロールするなど、途上国の小規模な農場においても利用できる新しい技術をもたらす可能性が期待されます。

学位取得後は熱帯作物学研究室で1年間の助手をさせていただいたのち、サウジアラビア王国の民間企業であるYousef Abdul Latif and Sons Agriculture Ltdの研究・開発部門において、博士研究員としてナツメヤシの研究に従事しました。サウジアラビアでは2030年までの経済改革計画「ビジョン2030」において石油依存型経済から脱

却を目指し、石油以外の産業発展が急務となっていますが、ナツメヤシ生産は国内産業における貴重な対外的収入源として着目されており、品質向上および生産の安定化がサウジアラビア国内の農業開発において重要な課題となっています。現地では、これまで未知であったナツメヤシの着果および成熟の生理学的特性の解明、有機栽培における品質向上や生産の安定化、また収穫後の鮮度保持および保蔵について、圃場での栽培試験から分析機器を用いたラボワークに至るまで広範囲にわたって研究を行いました。

世界に羽ばたく人材を育んでいく国際農業開発学科において、若手として学生により近い立場で、深く学び、巣立っていけるよう、これまで培った知識や経験を注ぎ込み全力でサポートしていきたいと思っております。

とはいえ、私自身も若輩者でこれから多くのことを学ばなければいけません。学生たちと共に成長していきたいと思っております。卒業生の皆さまにおかれましては、今後ともご指導ご鞭撻のほどをよろしくお願い申し上げます。



写真1:ナツメヤシの雄花の調査

ふれあいの旅を演出する **(株)アルファインテル**

代表取締役: **佐藤 貞茂** (拓殖15期)

電話: 03-5473-0541
FAX: 03-5473-0540
www.alfainter.co.jp
info@alfainter.co.jp

〒105-0004
東京都港区新橋 3-8-6 大新ビル 3 階
平日 9:30~18:30 土曜日 9:30~12:00 日・祝日は休み

観光庁長官登録旅行業1835号
IATA (国際航空運送協会) 公認代理店
社団法人海外ツアーオペレーター協会正会員

東京都知事登録旅行業第3-5792号

K!X

キックス・エアー・チケット
株式会社 キックス

代表取締役 **塩満 仁**

〒187-0003
東京都小平市花小金井南町2-17-2-603
Tel 042-458-1180 Fax 042-458-1180
携帯 090-1761-0970
E-mail shiomit@bird.ocn.ne.jp
E-mail info@kix-j.co.jp

http://www.kixairticket.com

拓友会ニュース 第35号

第59期 会計収支決算

(平成29年10月1日～平成30年9月30日)

一般会計

収入の部	予算	決算	差異
1. 会費	1,870,000	1,870,000	0
卒業生	1,720,000	1,450,000	▲ 270,000
既卒者	150,000	420,000	270,000
2. 事業	380,000	354,000	▲ 26,000
ニュース広告	200,000	190,000	▲ 10,000
行事等収入	180,000	164,000	▲ 16,000
3. 寄付金等雑収入	50,000	96,007	46,007
4. 前年度繰越	122,714	122,714	0
合 計	2,422,714	2,442,721	20,007

支出の部	予算	決算	差異
1. 事業支出	1,160,000	974,319	▲ 185,681
総会費	180,000	184,566	4,566
新入会員歓迎会費	200,000	200,000	0
名簿整備	100,000	50,000	▲ 50,000
ニュース発行	450,000	316,297	▲ 133,703
拓友会賞	50,000	43,456	▲ 6,544
在校生への補助	180,000	180,000	0
2. 管理費	900,000	704,512	▲ 195,488
会議費	100,000	89,663	▲ 10,337
印刷費	20,000	2,124	▲ 17,876
交通費	50,000	32,000	▲ 18,000
通信費	500,000	508,343	8,343
消耗品費	100,000	15,122	▲ 84,878
雑給費	100,000	20,000	▲ 80,000
雑費	30,000	37,260	7,260
3. 特別会計積立金	200,000	200,000	0
4. 予備費	162,714	0	▲ 162,714
5. 次年度繰越金	0	563,890	563,890
合 計	2,422,714	2,442,721	20,007

特別会計

収入の部	予算	決算	差異
1. 前年度繰越	2,224,939	2,224,939	0
2. 一般会計より繰入	200,000	200,000	0
3. 雑収入	100	17	▲ 83
合 計	2,425,039	2,424,956	▲ 83

支出の部	予算	決算	差異
1. 次年度繰越金	2,425,039	2,424,956	▲ 83
合 計	2,425,039	2,424,956	▲ 83

第60期 会計収支予算

(平成30年10月1日～令和元年9月30日)

一般会計

収入の部	第59期	第60期	差異
1. 会費	1,870,000	1,700,000	▲ 170,000
卒業生	1,720,000	1,700,000	▲ 20,000
既卒者	150,000	0	▲ 150,000
2. 事業	380,000	350,000	▲ 30,000
ニュース広告	200,000	190,000	▲ 10,000
行事等収入	180,000	160,000	▲ 20,000
3. 寄付金等雑収入	50,000	30,000	▲ 20,000
4. 前年度繰越	122,714	563,890	441,176
合 計	2,422,714	2,643,890	221,176

支出の部	第59期	第60期	差異
1. 事業支出	1,160,000	1,120,000	▲ 40,000
総会費	180,000	190,000	10,000
新入会員歓迎会費	200,000	200,000	0
名簿整備	100,000	100,000	0
ニュース発行	450,000	400,000	▲ 50,000
拓友会賞	50,000	50,000	0
在校生への補助	180,000	180,000	0
2. 管理費	900,000	920,000	20,000
会議費	100,000	100,000	0
印刷費	20,000	20,000	0
交通費	50,000	50,000	0
通信費	500,000	500,000	0
消耗品費	100,000	100,000	0
雑給費	100,000	100,000	0
雑費	30,000	50,000	20,000
3. 特別会計積立金	200,000	200,000	0
4. 予備費	162,714	403,890	241,176
合 計	2,422,714	2,643,890	221,176

特別会計

収入の部	第59期	第60期	差異
1. 前年度繰越	2,224,939	2,424,956	200,017
2. 一般会計より繰入	200,000	200,000	0
3. 雑収入	100	100	0
合 計	2,425,039	2,625,056	200,017

支出の部	第59期	第60期	差異
1. ブラジル東京農大会		100,000	100,000
創立50周年記念事業助成	2,425,039	2,525,056	100,017
合 計	2,425,039	2,625,056	200,017



2007年から国際農業開発学科を志望する中高生向けに学科を分かりやすく紹介するホームページ (<http://www.nodai.ac.jp/int/develop/index.html>) を公開しました。

海外実習や国内(学内・学外)実習、教員・学生の調査の様子、研究の様子について学部生・院生・教員からの投稿記事を随時掲載中。(<http://nodai.cc-town.net/modules/nmblog/categories.php>)。

国際協力を志すご子弟や教え子の進学先を考えていらっしゃる方、是非一度アクセスを。

学科教員・学生の受賞記録

【日本熱帯農業学会 第124回講演会 優秀発表賞受賞】

大穂清隆さん(農学研究科国際農業開発専攻博士前期課程2年)が、日本熱帯農業学会第124回講演会(平成30年9月29日~30日、京都大学)において、研究成果が評価され優秀発表賞を受賞。

題目:「ジャボチカバ・サバラの果実肥大および種子発達様式」

大穂清隆(国際農業開発学専攻博士前期課程2年)、真田篤史(国際農業開発学科)、篠原卓(国際食農科学科)、小塩海平(国際農業開発学専攻)、弦間洋(国際農

業開発学専攻)

【日本熱帯農業学会 第125回講演会 学生優秀発表賞受賞】

Michel OUYABEさん(国際農業開発学専攻博士後期課程3年)が日本熱帯農業学会第125回講演会(2019年3月16~17日/千葉大学)において学生優秀発表賞を受賞。

演題: Biological Nitrogen Fixation in Water Yam (*Dioscorea alata* L.) and Lesser Yam (*Dioscorea esculenta* L.) Associated with Endophytic Diazotrophic Bacteria

※所属は受賞当時

研究室紹介：熱帯作物保護学研究室

分野をこえた協力と研究

【はじめに】

熱帯作物保護学研究室は、現在、夏秋啓子先生、足達太郎先生、本橋慶一先生、長岡純子先生のご指導のもと、糸状菌・ウイルスなどの病原微生物や昆虫、野生動物などを対象に、分類・発生・生理・生態・行動などの研究することによって、迅速で正確な診断法や環境に配慮した実用的な病害虫管理技術を確認することを目指しています。

【研究内容】

◎植物病理

植物の病気の約8割は菌類によるものと言われています。イネにおいて、いもち病が問題となるように、菌類病は多くの作物で甚大な被害を起こす可能性を持っています。また、植物に感染するウイルスは、農薬では予防できず、一度感染すると病気を治すこともできない難敵です。当研究室では、温帯から熱帯までの農作物に発生する植物病原菌の同定や性状の解明、さらに、病原菌と戦う拮抗微生物の研究を行っています。ウイルスにおいては、日本だけでなく、東南アジアやアフリカにおいてイネ、根菜、バナナやパパイヤなど熱帯果実、さらには花や野菜に発生するウイルス病の発生調査を行うとともに、診断法、防除法の開発や改良などの研究に、電子顕微鏡観察や分子生物学的手法による研究までを含めて取り組んでいます。

◎昆虫・野生動物

害虫や害獣は、最初から害虫・害獣だったわけではありません。農耕の開始や農業革命とよばれる歴史的な生産性の向上といった人類のライフスタイルの変化とともに

に、以前はとるにたらないとされていた昆虫や野生動物による影響が、次第に重要視されるようになってきました。とはいっても、100万種以上といわれる昆虫種のなかで害虫はわずか5%程度にすぎません。90%の昆虫は、害虫でも益虫でもない「ただの虫」です。このように多種多様な昆虫の生態を理解することにより、害虫を「ただの虫」にかえるにはどうしたらよいのかを研究しています。

【研究室活動】

当研究室では、日常的に行う活動として、昼食会とゼミがあります。昼食会は、室員全員が昼食を持ちこみ、毎週火曜日のお昼に行われます。そこでは、普段の生活や研究の進捗状況などを話します。また、教員と学生が集まる場なので、研究室内のことについて話し合ったり、報告をしたりもします。加えて、普段話す機会のない先輩や後輩との親睦を深める場でもあります。ゼミは、毎週金曜日に行われ、大学院生を中心に、各室員の興味のある分野についての海外論文を和訳して紹介しています。

年間行事として、例年6月ごろに行われる研修旅行、8月と12月の納会、11月の収穫祭の時期には、熱帯作物保護学研究室OBOG会、2月には、卒業生追い出しコンパがあります。

現在、熱帯作物保護学研究室には、海外からの留学生を含め50名ほどの学生がおります。それぞれの研究テーマがあり、研究自体は個人で行いますが、困った時や助けが必要な時は、分野の垣根を超えて協力しながら生活しております。



(記・金川 梓)